

GF 通信

ジェンダーフォーラム
GENDER FORUM PRESS
女とは? 男とは? 考えるマガジン

和光大学 ジェンダーフォーラム 〒195-8585 東京都町田市金井町2160 和光大学ジェンダーフリースペース(G112) TEL 044-989-7777 内線4112

LECTURE

妊娠・出産の美術 中川素子氏 講演会

ジェンダーフォーラムでは、2009 年 10 月 28 日、文教大学教育学部の中川素子先生をお招きし、講演会を開催いたしました。演題は「妊娠・出産の美術」。女性を見つめる視点が歴史的・社会的に変化するなかで、妊娠・出産をモチーフにした美術作品にどのような傾向が見てとれるのかを説明されるものです。講演は、石像、絵画、写真、ポスターなど、67 枚のスライドを用い、妊娠・出産をテーマとした古今東西の美術作品を祖上にのぼせ、用意された 10 のキーワードにもとづいて縦横に論断していくかたちで進められました。

キーワードとなる視点は、「大地母神」・「母権制から父権制へ」・「女性の身体への問い」・「女性の傷と痛み」・「つながる生命」など、いずれも特定の時代・地域に限定されたものではなく、普遍性をもつ概念・フレーズでした。これら 10 のキーワードは、先生が 2007 年に上梓された『モナ・リザは妊娠中? — 出産の美術誌』(平凡社新書)を構成する 18 章のなかから選ばれています。ご自分の方法論について、先生は「体系立てずに、並列した作品の中から答を見つけていく」(220 頁)と述べられていますが、今回の講演でも、時代と場所を異にした複数の作品をひとつのキーワードのもとに結びつけ、論じられる手さばきはとても見事なものでした。

講演のなかでとくに印象深いご説明は、母権制から父権制への移行にともなう地母神信仰の衰微というストーリーです。地母神としてとりあげられた紀元前 25,000 年頃の「ヴィレンドルフのヴィーナス」や「チャタル・ホック出土の豹をしたがえた母神像」などは、母権制を象徴するもので、妊娠・出産を力強くみずみずしい生命力の発露として捉えているとのことでした。

もちろん、母性という属性は女性に対して安易に付与されるべきものではありません。そう考えると、ジェンダーという観点から講演の内容をどのように理解していくべきか、いささか戸惑いがあったのですが、それは笠原恵実子氏の

「PINK #9」という作品についての解釈を聞き、水解しました。

内視鏡により女性の胎内を撮影した氏の作品は、女性に対して負荷されてきたさまざまな「記号」を主題化し、色調をピンクに転換することで、その「記号化」を「再記号化」するものだということです。

先生ご自身は、「フェミニズム論を語ることにやや後退りするようなところがあり、意識が高いとは言えない」(『毎日新聞』1997 年 9 月 4 日)と韜晦されておいでですが、「PINK #9」の解釈には、ジェンダーへの目配りが十分に見られます。

また、先生は、「現代美術には……女性たちの思考の契機となり、すべてハッピーとは言えないまでも、女性たちを励ます力があるように思う」(同)と述べておいでですが、現代アートに女性をエンカレッジする契機を見出すスタンスは、ジェンダーをめぐる学生のエンパワーメントに腐心する私たちジェンダーフォーラムの活動にも相通するものです。



今回の講演会では、社会制度や社会意識を反映したさまざまな〈視点〉に応じ、妊娠・出産をめぐる女性の描かれ方に多様な広がりがあることを学ぶことができました。同時に、妊娠・出産をテーマとした美術とその制作者、そしてそれを鑑賞する女性たちに対する中川先生ご自身の温かな〈視点〉を感じることもできたのではないのでしょうか。

なお、先生のご著書はすべて本学梅根悟記念図書館に所蔵されています。また、GFS には、当日のハンドアウトおよびビデオもありますので、興味がある皆さんはぜひご来室ください。
(杉本昌昭/経営メディア学科)

リン・シーガルに聞く

70年代フェミニズムの歴史的意義



リンの自宅で。ロンドン在住の和光大学卒業生ウォータース・めぐみさん撮影

2009年の9月のある日、ロンドンの地下鉄ハイペリー・アンド・イズリントン駅で、リン・シーガルと待ち合わせた。

リンは、1970年にオーストラリアから14か月の赤ちゃんを連れてヒースロー空港に降り立って以来、シングルマザーとして地域運動、文筆活動などを続けた社会主義フェミニストで、現在ロンドン大学バークベック校の教授をしている。70年代の著作が2点ほど邦訳されている上、最近の自伝的著作 *Making Trouble* (2007) に惹かれたので、ロンドン滞在中にぜひ会いたいと、ぶしつけにも会見を申し込んだところ、気さくに応じてくれたのである。リンは地下鉄駅まで迎えにきて、車で自宅まで連れていってくれた。イズリントンは、多様な階層や民族の人々が住む、新左翼運動の拠点というイメージに反して、周囲は瀟洒な住宅街となっていた。リンの話では、30年間に地価が300倍も跳ね上がり、住民の階層も変化したという。リンの自宅は、70年代に、左翼活動家や芸術家のコミュニンの様相を呈していたといわれる。その同じ住宅に今も彼女は住んでいた。予想に反して、狭いながら、適度に草花の生えた庭があり、リビングには、花のほかに、ランタンや絵が飾ってあり、くつろいだ雰囲気的空間だった。ここで、紅茶とクッキーをご馳走になりながら、話をうかがった。

フェミニズムをめぐる世代間ギャップや、ジェンダー研究と社会変革運動との乖離など、日本の現状と共通する問題も指摘され、共感するところ大であったが、私にとって一番印象深かったのは、70年代英国のフェミニズム運動が新左翼運動と渾然一体化していたことである。リンによれば、当時の英国の男性活動家にはリベラリストが多く、フェミニズムの主張を当然の要求として、サポートしてくれたという。日本の新左翼との違いをあらためて感じた。話は、パレスチナ問題やオペア（食住つきで家事手伝いをしながら、語学を学ぶ

外国人）の待遇改善運動などに及び、3時間も話し込んでしまった。

この会見が縁で、ブリティッシュ・アカデミーのワークショップに参加する機会を得た。「70年代を再評価する」と題して、政治、経済、文化の各分野の報告と討論から成る会議だった。リンは、自分自身の経験を振り返りつつ、70年代の第2波フェミニズムが、戦後史の画期となったことを雄弁に語った。

すなわち、60年代までは、女性の声が社会的に真摯に受け止められることはなかったが、70年代の女性たちの性差別と文化的従属に抗する闘争によって、世の中のムードが一変した。女性たちは、保育所を作り、リプロダクティブ・ライツを主張し、教育を受け、職場における低賃金やハラスメントと闘い、家庭における性虐待、世界的な軍事主義と闘い、女性の人生と生活を調査し、既成の物の見方、聞き方、書き方に挑戦すること等々ができるようになった。いわゆる構築主義フェミニズムの興隆の中で、70年代フェミニズムへの批判があることを承知しつつ、リンは70年代フェミニズムが内包していた、階級差別や人種差別に対する闘争との連携関係をあらためて強調する。そして、主体や表象の理論化を急ぐよりも、むしろ現実社会の分析を通じて、社会制度の変革をめざすべきだと結論づける。社会主義フェミニストの面目躍如たるスピーチであった。

リンの主張の背景に何十種類もの社会主義政党が今でも健在で、労働党が政権を握る英国の政治文化風土があることを、あらためて実感した会議であった。

(井上輝子／現代社会学科)

OVERSEAS REPORT 2

アジアの女性たちの現在

マレーシア・サバ州における女性の労働参加

日本の皆さん、こんにちは。東マレーシアとも呼ばれるボルネオ島サバ州における女性の労働参加についてお話をさせていただきます。

現在、私が所属するサバ大学人的資源経済学科では「女性の労働参加」に関する調査研究が盛んです。一般にマレーシアでも高学歴の女性ほど、仕事を通じてキャリアを積み重ねていくことに熱心です。



著名な労働経済学者であったジェイコブ・ミンサーは以下のような興味深い現象を指摘しています。時間あたりの実質賃金が上昇すると、(1)男性の労働参加が減る一方で、(2)女性の

労働参加が増加するというのです。

給与が増えれば、男女ともに労働意欲が高まりそうなものですが、決してそうではなかったのです。このうち、賃金上昇に伴って男性の労働参加が減少することは、英国の経済学者ライオネル・ロビンズが提唱した「後方屈曲労働供給曲線」に従って説明できます。すなわち、低水準の給与を貰っている人は労働時間を伸ばそうとしますが、すでに高い給与を貰っている人は（時間当たり賃金が増えるのであれば）、かえって労働時間を減らして余暇を増やそうとします。

また、少し説明が難しいのですが、通常、夫の給与が増えれば、主婦の労働参加は減りそうなものです。ところが、かえって女性の労働参加が増加しているということは、主婦が給与水準の高い仕事につくことで、夫の労働時間を減らし、その余暇時間を伸ばしているとも考えられます。

経済成長を続けるサバ州でも、近年、女性の労働参加率が高まっています。1992年にサバ州で女性の労働参加率は39.1%でした。途中にでこぼこはありますが、2002年にはこの比率が45.4%へ達しています。一方で、男性の労働参加率は1992年の88.5%から2002年の85.6%へと下落しています。

表1：男女の労働参加率
(マレーシア・サバ州)

Year	Total	Male	Female
1992	65.0	88.5	39.1
1993	64.9	88.5	37.7
1994	n/a	n/a	n/a
1995	65.8	89.2	39.3
1996	68.7	90.1	43.3
1997	65.8	88.6	38.7
1998	65.9	88.7	38.6
1999	65.2	88.0	38.2
2000	64.5	86.4	40.8
2001	65.6	85.2	44.5
2002	66.2	85.6	45.4

出所：Department of Statistics, Sabah

実はこうした現象は世界的な傾向として指摘され、世界の潮流と同様にサバ州でも女性は益々、労働市場へ参加しようとしています。それは、「マレー女性は結婚して家庭に留まるべきだ」という伝統的な慣習にも変化が見られることを意味します。また、家事を軽減する家電製品の普及も女性の労働参加を後押ししていると思われます。

ここで表1をご覧ください。表からは、1997年から1999年にかけてサバ州で女性の労働参加率が低下したことが分かります。これは1997年に発生したアジア経済危機の影響を女性がもろに受けた結果です。この期間、女性が仕事を見つけることはたちまち難しくなりました。女性が労働市場で弱い立場に置かれていることの証左といえます。この間、男性の労働参加率に大きな変化が見られないので、尚更、この点が強調されます。

表2はサバ州の女性の労働参加を年齢階層別に示したものです。それによると15歳から24歳の若い階層では1987年に28.5%だった労働参加率が10年後の1997年には34.0%ま

で上昇しています。それは2002年に再び28.0%へと下落しています。女性の大学進学率が高まってきたことを意味しています。

確かにここ数年の間に、サバ州でも大卒以上の経歴を持つ女性が男性に伍して仕事をこなす例が増えてきました。もちろん、女性の教育水準が高くなるにつれて、女性が労働市場に参加する年齢が高くなっていきます。そして、高い学歴は女性に高い給与を与え、先に述べたように高い賃金率は（男性よりも）女性の労働参加率を高める傾向を持っています。

表2：女性の年齢階層別労働参加率
(マレーシア・サバ州)

Year	15-64	15-24	25-54	55-64
1987	100	28.5	65.8	5.7
1988	100	29.4	64.2	6.4
1989	100	29.2	65.5	5.3
1990	100	29.4	63.6	7.0
1991	n/a	n/a	n/a	n/a
1992	100	30.4	64.7	4.9
1993	100	30.9	64.7	4.4
1994	n/a	n/a	n/a	n/a
1995	100	27.6	66.7	5.7
1996	100	32.1	63.3	4.7
1997	100	34.0	61.9	4.1
1998	100	31.2	63.5	5.3
1999	100	30.9	64.7	4.5
2000	100	27.6	68.0	4.4
2001	100	26.8	68.8	4.4
2002	100	28.0	68.4	3.6

出所：Department of Statistics, Sabah

上記のような成果があるとはいえ、まだまだサバ州における女性の労働参加は先進各国に比較して低調です。また、女性の雇用を守る制度も十分とは言えません。そこでサバ州をはじめとしてマレーシアでは女性の人的資本を高めるような施策や法整備が望まれるところです。今後もサバ州の女性の地位向上を目指して、日本の事例も参考にしながら研究を続けていきたいと考えています。

(原文英語)

(カイル・ハニム・パジム)

／マレーシア国立サバ大学経営経済学部)

(翻訳：加藤巖／経済学科)

ESSAY

ジェンダーフリースペース蔵書の魅力

昨年11月のある日のこと。G棟一階をたまたまあるいて、なんとなく感じる場所があり、ある部屋をのぞいた。

私の研究分野のひとつは第二次世界大戦後の日本における社会運動で、ちょっとくすんだ色の本が目に入ると身体が反応してしまう。本当は古本コレクターでもあり、コレクションを役立てることのできる分野として社会運動史に流れ着いてしまっただけなのかもしれないが、その日もちらっと目に入った本がきになってその部屋に入ってしまったのだった。

足をふみいれてからわかったのだが、そこはジェンダーフリースペース（以下 GFS）だった。「あの一、奥にある本が

気になるので見てもいいでしょうか」と担当の浦田さんにたずねてみると、それは松井やよりさんの旧蔵書なのだという。

身体の反応は正しかった。これから研究してみようと思っている分野として、一九七〇年代に急速に広がりを見せたアジアと関わりをもつ市民運動の動向というものがあるのだが、その中でも重要なものの一つとして、松井やよりさんたちが始めた女性の連帯運動があつて、関連の文献をあつめていたところだったからだ。

松井やよりさんは父親がプロテスタントの牧師で、東京外大を卒業後朝日新聞の記者として活躍しただけでなく、その記者活動の中で出会った人々やクリスチャンのネットワークを広げながら、グローバルな市民運動を結び合わせていった活動者でもあつた。高度経済成長を背景にアジアへの日本企業の経済進出が本格化した一九七〇年代、日本の男たちがアジアへ出かけ、アジアの女たちの性を買う「買春観光」に反対する運動を皮切りに、アジア各国の民主化運動支援や日本とアジアの歴史的問題を問う「アジアの女たちの会」、これを発展させたアジア女性資料センターの活動、晩年に取り組んだ従軍慰安婦問題をめぐる天皇制国家の戦争責任を問うた「アジア女性国際戦犯法廷」の活動、松井さんの遺志を継いだ人々による「女たちの戦争と平和資料館 wam」設立運動、さらに広範な国際的運動へのかかわりなどなど、一人の身体が抱え込むことの限界を超えたものと通常だったら考えられるような多重多層的で濃密な課題を受け止め発展させたのが松井やよりという人物だった。

GFS では、松井さんがかつて愛読した蔵書を受け入れており、それだけでなく貸し出しも行っているという。

フェミニズムやメディアといった、彼女の活動分野に関わる書籍が多いが、中には市販されていない運動体のパンフレットや私家版の書籍なども含まれており、貴重なコレクションとなっている。本棚を見ていくと、今まで知らなかった重要な文献をいくつか発見することができた。蔵書のいくつかを開けば、松井さんが繰り返し読んだページの汗のにじみや、読みながら考えたアイデアの書き込みなどを見つけることもできるかもしれない。松井さんについてもっと詳しく知りたい人は、東京の新宿区西早稲田にある「女たちの戦争と平和資料館」を訪ねてみれば、松井さんが遺した市民運動関係の資料にも出会うことができるし、GFS でも松井さんたちアジア女性資料センターが発行した（そして現在も発行が続いている）『女たちの21世紀』のバックナンバーを読むことができる（ひとこと言い添えておくと、これはとてもいい雑誌だが一般の書店では販売していない）。

このほか GFS には、松井さんの旧蔵書以外にも古い『暮らしの手帖』（この雑誌も第二次世界大戦後の日本において、個性的な生活者の思想を育んできたユニークな雑誌である）

のバックナンバーや、他の方から寄贈されたフェミニズムや女性史、女性問題関係の蔵書、ジェンダー・セクシャリティ関係のビデオやミニコミなども豊富にある。これらはいずれも借り出して閲覧できるということなので、ぜひ利用してみるといいと思う。わからないことはスタッフがいてねいに案内してくれるし、運がよければお菓子もごちそうになれるかもしれないよ。

（道場親信／現代社会学科）

FROM THE GENDER CAFÉ

ジェンダー・カフェ便り

やってみよう和光流クッキング！！

2009 年を締めくくる最後のイベントとして、12 月 2 日にジェンダーフォーラム主催の学生の為の料理教室「やってみよう！和光流クッキング」を G 棟 112 のジェンダーフリースペースで開催しました。



当学でも至る所でカップ麺を吸る学生達を多く見かけます。食生活のアンケートを見ても、決してバランスのとれたものではありませんでした。そこで、学生達も食に関心を持ち、調理することが楽しいと感じられるきっかけになればと思います。当日は、十数名の参加があり、不十分な調理設備にも関わらず、男女とも楽しそうに調理し、自分達の作った料理を美味しそうに食べていました。この日のメニューは、①餃子3種、②豚汁、③ひじきチャーハン、④苺のデコレーションケーキ（クリスマスに因んで）などでした。

（安河内みどり／GF スタッフ）

EVENT INFORMATION

講談師・宝井琴桜さん公演

2010 年 6 月 2 日（水曜日）、GF では、講談師・宝井琴桜さんをお招きし、ジェンダーにかかわる演目をご披露いただく公演を予定しています。開演時刻等、委細が決まりましたら改めて告知します。関心のある方は、GF スタッフにお気軽にお問い合わせください。